

羊とドラコ

「紡ぎ屋カラムと紅い糸」

脚本 竜崎だいち

〈登場人物〉

- ・紡ぎ屋カラム
- ・紡ぎ屋ロウ
- ・発明家シレン
- ・編み屋トット
- ・奏で屋リリ
- ・彩色屋イロハ
- ・紡ぎ屋見習いランプ
- ・作家
- ・銀行員
- ・壁のシミの猫ミュー
- ・メリノ
- ・師匠

プロローグ

羊のメリノが登場する。

壁のシミを見て。

メリノ

お久しぶり、壁のシミの猫。もうすぐね、ご主人が帰ってくるかもしれないよ。知ってた？ んー……返事がない。ただの屍のようだ。ま、しゃあない、だってお前、「ぼく」のこ
と嫌いだもんな。さて。

メリノ

むかーしむかし？ いや、今のおはなし？ それとも、時間も場所も違う、まったく別の次元で紡がれたおはなし？ ま、なんでもいいや。あるところに、糸をつむぐのが大好きな女の子がいました。名前は、紡ぎ屋カラム。御年18歳。今は一人で旅の途中。彼女の指から紡ぎだされる糸は、それはそれは美しく、行く先々で人々を魅了し続けていた。彼女の故郷は、紡ぎの里。この世界の紡ぎ屋はすべて、そこで先人から紡ぎ方を学んだ。見渡す限りの綿畑には真っ白なコットンボールの花が咲く。広大な牧場には、何百頭の羊がゆつくりと牧草を食み、毛を蓄える。そんな景色が、行けども行けどもずっと続いていく……。紡ぎの里は、そこが紡ぎの里と言われはじめた頃からずっと、変わらず穏やかな毎日を紡いでいる、あんなことが起こる、前の日までは。
これは、そんなカラムと仲間たちが巻き起こす、可笑しくも悲しい、ちょっと不思議な、物語。

カラム

森のざわめき。
木々の間から、カラム、登場。

ふうわつ、蜘蛛の巣、ペッペッペッペッ。

体の蜘蛛の巣やらを取り除いて、カラム、あたりを見回す。

カラム

……懐かしいなあ。この森、小さい時みんなとよく遊んだなあ。えーつと、確か、この森を抜けると……紡ぎの里、か。……何年ぶりだろ。えーと、1、2、3、4、5、……ろつ、6。6年ぶり、……か。うわ。なんか、恥ずかしくなってきたなあ。……覚えてるかな。忘れられてないかな。……や、やめとく？ やっぱやめとく？ 帰るの。え、ここまでできて？ いやでも、ここまでわたしが来たことは、里のみんな分かんないわけだし、ほら、たまたま？ 偶然？ 旅の途中でこの辺まで来ちゃっただけかもしれないし、だいたいさ、6年も帰ってなかったところに、6年ぶりに帰るっていうのも、ホラ、これ、なかなか勇氣がいるわけ……、あ。明日、明日にしよう。ほら、今日はあの辺にあった、おつきな木の幹をベッド代わりにして……。

カラム、ふと、懐にあったものを思い出して。

カラム

……いや。やつぱ、行くか。そうだよなあ、それしかないよなあ、だつて。

人 人 人 人 人
 カラム
 しゅっぱつしんこう！
 こうじょうけんがく！
 くじゅうのけつだん！
 ん、ついた、それ負け！
 え、待って、この手紙どうすんの！
 なにやっつてんの！

人々、手紙を流しつつ、変化して。

人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人
 流浪の手紙
 秘密の手紙
 手紙の行方は
 だれも知らない
 渡り歩いた
 108つの手
 人から人へと
 流れ流れて
 いつか届くか
 届くと知れぬ
 いつかは届けと
 願いはつるる
 太陽と月
 流れ流れて
 旅を続ける
 彼女のもとへ

カラムの手元に届く、手紙。

カラム
 老人

カラム

老人

カラム

老人

カラム

老人

カラム

老人

カラム

……

ほんとはわい。年寄りの言うことは素直に聞けいと言うと
 ろうが。「紡ぎ屋カラムに」、わしはちゃんとう聞いたわい。
 手紙の内容は、こうじゃ。紡ぎ屋カラムへ、この手紙を果た
 してきみが読むかどうか、分からず書くぼくもどうかしとる
 と思います。なんか切ない気持ちがあつてくるじゃろ、ん
 でな。

じいさん、読んだでしょ。

あ？ あ、あ、み、み、見とらん、読んどらんよわしは。

……。(手紙の口をピロピロさせる。つまり、開いている)

読んどらんよわしは！ 年寄りを疑うな、嘘なんかついたら
 ん。

読んだでしょ。

読んどらんよ！ 読んどらん。てつきりラブレターかと思つ
 たのに全然違つてがっかりしたなんてことは全くない！

そもそも、なんでこんな手紙が108人の手で運ばれたんか、

そもそも108人つちゅうのもまあ、ほんととかどうか。

それはほんと。

は？

108人、それはほんと。あいつ、なんで封するの忘れるか
 なあ。(封筒から手紙を取り出して) ほら、手垢がついてる。

108人分の手垢、手紙の送り主の分も含めて、この手紙に

しつかり残つてる。……恥ずかし。

舞台上に、手紙の主が出てくる。

ロウ

この手紙を、果たしてきみが読むかどうか。分らず書くほかもどうかしていると思います。元気ですか？ こちらは元気です。なぜ手紙を書いているのかというと、ちよつと困ったことがあるからです。きみがぼくに託した、羊のメリノ、覚えてる？ あいつの事なんだけども、きみが旅に出てから、実は、誰にも、一度も毛を刈らせません。刈ろうと思つても逃げてばかりで、つまり、きみが村を出てから6年間、ずっと毛を刈られずに、今や羊毛のお化けみたいになっちゃってます。つきましては、飼い主であるきみに、メリノの毛を刈つて頂きたく、こうして手紙を書きました。宛先が分からないので、ちよつと町に来ていた、サーカス団の作品師に手紙を託します。どうかこの手紙が、今もどこかを旅するきみの元に届きますように。……久々にカラムに会いたいです。きみの親友の、ロウより。

カラム、手紙を見つめる。

ロウ、カラムを見つめ、去る。

その後ろに、メリノの姿がぼんやりと見えている。

作家、登場。うーん、とか、唸っている。

何かを書くこうとしているが、一向にペンを紙に落とさない。

と、そこへランプ登場。

そこかしこを走り回り、誰かを探している。

ランプ
師匠ーっ。師匠うーっ。師匠、師匠、しっしょー、しっしょー

ーっーっ。

作家
うーん。

ランプの「師匠」と作家「うーん」をひとしきり、やる。

作家、ランプがうるさいのでたまりかねて。

作家
何だランプ、また師匠探しか。

ランプ
あ、作家。うん、一緒に市場にいたんだけど、はぐれちゃっ

て。

どうせまた、うちで糸紡ぎだろ。

作家
えーっ。4日ぶりにうちから出てきたのにな？

作家
4日ぶりだったら、(手帳のページをめくって) うん、まだ

出てる方じゃないか。

ランプ
ま、それはそうなんだけど。作家は何やってんの？ また例

の、うーん？

作家
うーん。なかなか書けなくてな。

ランプ
仕方ないよ。まだ太陽がてっぺん過ぎてないもの。作家は、

夜派でしょ。

朝から書けるようになりたいんだがな。

無理無理。それは絶対無理。

……。

作家、どしたの？

……ランプ、急いでたんじゃないのか。

そうだ、師匠に伝えなきゃいけない事があるんだった。じゃ

ね作家。師匠ー。ロウ師匠うーっ。(去る)

……うーん……。(去る)

と、そこに奇妙な仮面をつけたカラムが入ってくる。

カラム、仮面をちよつとずらして。

カラム

……え？ ここどこ？ 6年で、こんなに変わる？ (仮面

を取って) ……こんなのつけてるから、人に道も聞けないし。

またも、手紙を読むロウが現れる。

ロウ

追伸、里に着いたら、同封の仮面を付けてください。実は、

村の治安が今そんなに良くなって……つていうのは建前

で、ちゃんとぼくがきみを見つけれられるように。きみを見聞

違えることなんて、きつとないとは思うんだけど。6年は、

思った以上に長い時間だったりするし。とにかく、里に入る

前に、ちゃんと仮面を付けて下さい。ちなみに、この6年で

色んなものが変わったから、ちよつとびつくりするかもしれない

いけど。ぼくの家の場所は変わってません。里で待ってます。

ロウ、消える。カラム、手紙と仮面を見比べて。

カラム
……(封筒の中に) どうやって入ってたん。……探そ。とりあえず、ロウの家だな。

カラム、去る。
代わりに、編み屋トットが登場。

トット
さあさ、お立ち合いお立ち合い！ 月に一度の大放出、時間のある奴は見ていつて、時間のない奴も、一目見ればきつと見たくなるつて。編み屋トットの新作即売会、良いものいっぱい取り揃えたよ、さあさ、寄つてらっしゃい見てらっしゃーい！

トットのまわりに、人が集まってくる。

トットの助手として、イロハが荷物持ちをしている。

トット
まずはこちら、クリーム色の柔らかな素材で編み上げられたこの逸品、なーんだ、ただのマフラーか、と思つたそのあなた、甘い、鈍い！ 研ぎ澄まして！ なぜつてこれは、編み屋トットの新作即売会、ただのマフラーじゃございませぬ。こちらのマフラー、素材は羊毛？ アルパカ？ そんなんじゃない。なんと、この里イチ美味しいスープをこしらえる、クノウルおばさんのミルクスープの湯気から紡いだ逸品だ。極寒の寒さでもほんのりあつたかく、首に巻けば、お母さんの香りのようなやさしい甘さが鼻腔をくすぐる。間違つても食べちゃわないように、そこだけ十分気を付けて！

トットに次の商品を渡すイロハ。
トットそれを受け取り、前の商品はぼーんと投げ捨てる。
それを必死にキャッチするイロハ。

トット
次はこちら、がっしりとした固めの素材でがしがし編み込まれたこの鍋敷き、なんと、アルマジロの皮膚から紡いだ糸で編み上げた逸品、どれだけ熱いものでもこれを敷けば机が焦げる心配はなし！ (投げ捨てて) モミの木から紡いだ糸で編んだ靴下には、必ずサンタがプレゼントを運んでくれるつていうし、(投げ捨てて) 里一番の美しい湖から紡いだ透明な糸で編んだティーカップは、どんな飲み物でも最上級に美味しく変えてしまう不思議な力があるという！ (投げ捨てて) ……あ。

トット、カップが割れ物だという事に投げてから気付く。
人々、あつ、と息をのむが、

イロハ、あわてふためきつつも、なんとかキャッチ。

イロハ・トット・人々　ふうー。

トット　イロハくん、ナイスキャッチ。

イロハ　はい。

声　へーんなの。

観客の中から、声の主が現れる。

リリ　編み屋トット。紡ぎの里の腕利き編み屋は、いつから陶芸家

になったの？

リリ。

相変わらず、分かってないなりりは。いや、「分かりたくない」の間違いかな。

何よそれ。

ねえイロハ。今のリリの心から糸が紡げれば、一体何色の糸が紡げると思う？

え、いや、あの。

……やつてみたら。

え、でも、おれ、糸なんて……。

知ってる。あんたは色つけることしか能がない。糸なんか紡げやしない。

……。

冗談だよ。この世のいかなるものから糸が紡げたとしても、ただひとつ、人間から糸を紡ぐことは出来ない。……今は、ね。

あ、はい。

……。

ねえリリ、面白いだよ、毎日、色んなものから糸が紡げるようになってる。これもそう。いったい誰が、コップの水から糸が紡げると思った？ 水の表面によーつく目をこらすんだって。そしたら、すーつと一本、糸がのぼってるのが分かる。それを、そつとつかんで、くつと引つ張つたら素早くくるつと、燃りをかける。そしたら後はこつちのものも、コップの水がなくなるまで、どんどん、どんどん、水の糸が紡がれていく。リリも見においでよ。

遠慮しとく。

仕事しに来たつていいんだよ。

リリ

トット

は。

奏で屋リリ。紡ぎの里一番の奏で屋。紡ぎ屋のそばで音楽を奏でるのが仕事。シレンのそばで弾いてやつてよ。もしかしたら、リリの音楽からも糸が紡げるかもしれない。

行かない。

なんで。

だってあたし、専属だから。紡ぎ屋ロウと、……紡ぎ屋カラム。

リリ、去る。

……強がっても無駄なのに。

え、何ですか。

……別に。さあさ、寄つてらっしゃい見てらっしゃい！ 編み屋トットの新作即売会だよ！ 蚕や絹はもう古い、お次はどんな糸で編む？ 新作どんどん入荷中！ さあさ、寄つてらっしゃい見てらっしゃいーい！

トット、イロハ、去る。

イロハは、リリのことを気にしている。

リリ
 かわいそうーっ。毎日毎日、かいがいしくも通い詰めさせて、
 ロウの身の回りのお世話までさせておいて、肝心の紡ぎ方は
 ひとつも教えてないばかりか、あまつさえ、わずかな食べ
 物もおごるつもりもないなんて！ 鬼！ 悪魔！ ひとでな
 し！ ○○○！
 リリ、きみ楽しんでるだろ。
 リリ、分かる？
 ロウ、うん。
 ランプ、大丈夫だよリリ。あたし、好きでお世話してるだけだもん。
 リリ、まー、なんてかいがいいい。
 ロウ、リリ。
 ランプ、この部屋ね、恐ろしいくらいとつちらかつてるけど、興味深
 いものもいっぱい埋まつてるから、片づけてるだけでも勉強
 になるんだよ。
 リリ、ものは言うようね。
 ランプ、それに、(カッコつけて) おとこのひとりぐらしは、どうし
 てもちらかつちやうしね。
 リリ、わお、おとなー！
 ランプ・リリ、ヒューー。
 ロウ、おかげで、自分の物がどこにしまわれてるか、全然分かん
 なくて困つてるんだけど。
 ランプ、何か教えてくれたら、引つ張り出してくるから教えて。昨日
 片づけたのは確かあの辺の洗濯物の……。
 リリ、ふんふん。
 ロウ、あーっ、……別に、今はいい。今は困つてない。
 リリ、ね、せつかくだし、ちよつと出かけようよ。ランプちゃんも
 来てくれたんだし、この部屋も、換気しないと埃だらけだし。

ランプ、ね、ランプちゃん。
 ランプ、あー……
 ロウ、……なに。
 ランプ、忘れてた！ あたし、師匠に伝えなきゃいけないことがある
 んだつた。
 ロウ、しょうもないことだつたら、ゲンコツ。
 リリ、メリノがいなくなったの。
 ランプ、メリノ、羊の？
 ロウ、そう、師匠の大事な預かりものの。
 リリ、いなくなった？
 ランプ、うん。
 ロウ、どうせまた、誰かが毛を刈ろうとしたんじゃないの？
 ランプ、そんなじゃないんだつて。羊飼いが朝、小屋に行つたら
 なくなつてたつて。
 リリ、朝にいなくなったのに、どうして今頃？
 ランプ、怖くて言えなかつたつて。どれだけ大事にしてるか知つて
 から、つて。
 (ロウを見る)
 ……。
 ランプ、とにかく探さないとね。大事な預かりものだし、もしものこ
 とがあつたら。
 ロウ、大丈夫、あいつの行き先なんて決まつてるから。どうせカラ
 ムんちの庭か、里のはずれの湖か……。
 ランプ、カラムんち？
 リリ、あ。
 ロウ、うん、カラムんちの。

ランプ

あれ、師匠知らないの？ カラムんちは確か、こないだもう。

リリ

(さえぎつて) ランプちゃんー！

ランプ

ふおう？！

ロウ

え。

リリ

ロウも、なにぐずぐずしてんの！ メリノ探しに行くよ！

ロウ

リリ？

リリ

早くしないと。森の向こうのサカサツララの谷にでも落ちた

ロウ

りしたら、二度と地上には戻ってこれなくなる。

リリ

そんな遠くまで行くかな。

ランプ

いいから早く、足動かして。ランプちゃんも、ほら糸車直して、まずは湖行ってみよ！ ほら早く！

ランプ

師匠、リリ姉ちゃん、ちよつと待ってー。ロウ師匠うーつ。

退場。変わってカラム。

カラム

(見回して) どこだここ。あーもう無理だわ、これ入り口にも戻れないパターンのやつだわ。ロウもメリノも見つからないし。もーつ、とりあえず、進も。うん、進め進め進め、進めばぎつと何かにぶつかるさ！ いっつてえ！

カラムの目の前に壁。しこたまおでこ鼻を打ち付けた模様。痛くてその場でしばしうずくまる。

ややあつて、自分の目の前に巨大な壁があることに気付く。

カラム

…壁？ こんなところに？ お城？ 砦、かな。

見上げると、煙が天に昇っていくのが見える。

カラム

煙だ。黄色、緑、青…。細い糸みたいな煙が、天に向かって、渦巻いてるみたいに見える。

カラム、右、左、右、と見渡す。

カラム

入り口は。どっちだ？ こつちか？ ……こつち！

そのまま、左側に、去る。

研究員たちと紡ぎ屋・シレン。

色々な物から糸が紡がれていく様子が描かれる。

シレンは片手にだけ紅い手袋を付けている。

シレン、手袋をした手で糸の先を探る。

ひととおり終わって。シレンとトット。

トット
お疲れ、シレン。

シレン
そつちもお疲れ。どうだった。

トット
そりやもうバカ売れに売れまくって、完売御礼。

シレン
そりやよかつた。市場でなんか面白いもん見つけたか？

トット
え……、いや、ぜんぜん。古風な毛糸や絹糸ばつか。あれ

だね、里のやつらからはもう新しいもの作ろうっていう気概

が感じられないね。

シレン
そうか……里の、外からは、面白いもの来てなかったか。

トット
うん。

シレン
……あつたよ。

トット
あつたのか。

シレン
うん。

トット
なにが来てた。

シレン
教えてほしい？

トット
早く教えろよ。

シレン
黒い……。

シレン
くろい……？

トット
ゴツゴツした……。

シレン
ゴツゴツした……？

トット
馬の顔した体は鹿の手乗りサイズの木彫りの人形。

シレン
え、は？

トット
シレンが興味ありそうな糸は、売られてなかった。

シレン
……そつか。

トット
いーのいーの。この里には、今や紡ぎ屋シレンっていう天才

紡ぎ屋がいるんだから、誰も想像しなかつた新しい糸が、毎

日のように紡がれる。里の未来は明るいのだ。

シレン
……だといいいけどな。

トット
シレン、奥に去ろうとする。

シレン
シレン。

トット
なに。

シレン
また籠るの？

トット
それが仕事だから。

シレン
あんまり……さ。

トット
……。

シレン
こだわらなくていいと思うな。だって、シレンは、今のまま

でも十分すごいし。

トット
(つとめて明るく)分かってることも。おれはすごい、それは、

シレン
生まれたときから決まってることだ。

トット
いよつ、神の指先を持つ男！今やシレンがいれば、どんな

ものからだって糸の先を見つげ出すことができる。

シレン
使い古した靴ベラ、

トット
黒い……。

シレン
黒い……。

トット
シレン

穴の開いた帽子、
藁ぶきのベッド、

トット

チョコレートのひとつかけら。他の誰にも、まだ真似は出来ないこの技術。ちゃんと広げれば、この里はきつともつと大きくなる。中心には、シレン。きみがいる。この里は、きみがいればもつと大きくなる。

シレン

……。

トット

そうだ。作家がまたきてた。やっぱりこの事書かせてくれないかって。

シレン

いつも言ってるだろ。追いつて。

トット

……分かった。

シレン、部屋に戻るうとしていたが、

しょんぼりしているトットを見かね、振り返って。

シレン

……トット、今から時間あるか。

トット

え。うん。

シレン

せつかくだから、ちよつとだけ、市場覗いてみようかな。

トット

うん！ みんな喜ぶよ。

シレン

いや、今日はあれだ、たしか食い物の露店も出てるはずだろ。

トット

え、あ。……出た、けど。

シレン

よしつ。行くぞトット。今日はな、スペシャルにしてくれ。

トット

……スペシャルつてことは……練乳入りコーヒーと、パウ

ドケーキのシロップ漬け。

シレン

シロップはひつたひたにだ。おばちゃんに追加してもらえ。

シレン

忘れんなよ。

シレン、うきうきと出ていく。

トット

……自分で頼めばいいのに。

シレン

(声) おいトット、早くしろつて、置いてくぞ！

トット

はい、今すぐに！

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

トット、楽しそう。そのまま、去る。

声
カラム
早く隠れて、早く！
え、なに？

カラム、言われたとおりに物陰に隠れる。すると。
扉を開けて、シレンとトットとが出ていく。
甘いのがどつこのうのと言いついて。
カラムには全く気付いていない。

カラム
声
えー、引き戸……。 (走り去った人を見送って) 今のは。
カラムだ、やっぱりカラムだ、カラムー！

声の主、唐突に飛び出してくる。その姿は、ネコ。
カラムに抱きつく。

カラム
（抱きつかれて）うわっ！

お前、いったいどこ行ってたんだよおお！ おれ、ずー
ー！とひとりできみしかつたんだそおおお！

カラム
（抱きつかれている）待って、だれ、落ち着け！

おまえに分かるか、突然誰も帰って来なくなつて、誰ともし
やべれず、一人で過ごしたおれの気持ち！

カラム
お前……もしかして、ミュー？ 壁のシミのミュー？

そーだよおおお！ うわあああ、カラムが名前呼んだああ
あ！

カラム
さつきの声、お前だったのか。

ミュー
そーだよおおお。なんだよ分かんなかったのかよおおお。

カラム
ミュー
あーあ、よしよし、泣くなつて。ミューは相変わらずだな。
はっ。

カラム
ミュー
なに。
しまった。おれ、カラムを許さないつもりだったんだ。

ミュー、突然よそよそしく。

ミュー？

おれを置いてどつか行つちまった薄情なカラムなんて、もう
知らん。

ミュー。

知らん知らん。(そっぽ向いて)

みゅーうー。

知らん知らん知らん。(そっぽ向いて)

カラム、リュックからネコじやらしっぱいものを取り出して。

ミューちゃん。

知らん知らん、う、う、う、……はうー！（じやれる）

よしよしよし。でもミュー、お前なんでこんなところに？

え。

だつてお前、うちから離れられないんじゃないやなかったの？

あの、それは。

もしかして、お化けも進化するのか？ 幽体離脱が可能にな

つた？

あつ、いや、そんなんじゃないやなくて。……あれ。

ミュー、自分が出てきた方向を指して。

カラム

あれ？ あーっ、うちの玄関の扉！ 誰、こんなところに捨てたの！ まったく。あとでロウに言いつて運んでもらわないと。

ミュー

あの、カラム、それがさ。

カラム

そうだ、なあミュー、お前、ロウんち分かる？

ミュー

え、ロウのうち？

カラム

うん。探してるんだけど見つからなくて。メリノの毛を刈つてやんなぎやいけないんだ。ロウんち分かるなら、案内して欲しいの。

ミュー

メリノ……。

カラム

あつ、そうか。ミューはメリノ嫌いだったつて。

ミュー

なあカラム。また、昔みたいに一緒に暮らせる？

カラム

え。

ミュー

この里で、みんなと一緒に、昔みたいに一緒に暮らせる？

カラム

……それは。

ミュー

おれ、さみしかつたんだよ。突然、カラムがうちに帰つてこなくなつて。カラムだけじゃない。カラムの友達も、師匠も、

カラム

みんな家に来なくなつて。

ミュー

ミュー。

カラム

もちろん、おれは、カラムんちの玄関にある、雨漏りの日に

ミュー

偶然出来た、壁のシミの猫。おれと話が出るのはカラムだけ

カラム

だったけど、話が出来なくつても、おれ、みんなの顔が見

カラム

られるだけでよかつた。それなのに、6年の間、誰も家に来

カラム

ることはなかつた。

ミュー

……そつか。そりゃ、寂しかつたよな。ごめんな。

カラム

なあ、カラム。なんで里から出てつたんだ？ 何かあつたの

カラム

か？ それとも、おれなんかと喋れるような、変な力持つつたのが原因なのか？

カラム

違うよ。

ミュー

じゃ、なんで。

カラム

師匠に誘われたんだ、里を出て旅しないかつて。それだけ。お前を置いてつちやつたのは、ごめんな。けど、お前はシミ

ミュー

だもん。旅には連れてけなかつたの。

カラム

カラム。帰つて来てよかつたよ。

ミュー

え。

カラム

実は、ちよつと恥ずかしかつたんだ、あと怖かつた。6年も

ミュー

旅してて、突然帰つてきて、どんな顔したらいいんだろつて。

カラム

けど、こうやつてミューに会えて、話が出来ただけでも、帰

ミュー

つてきてよかつた。

ミュー

……！

ミュー

ミュー、何を思ったか。

カラム

扉のシミの出来ているあたりをがっしつかむ。

カラム

シミのあたりだけを器用に豪快にバリバリつとはがす。

カラム

なぜかシミだけがはがれたものを、小脇に抱えて。

カラム

み、ミュー？！

カラム

……行くんだろ、ロウのところ。おれが案内するよ。

カラム

お前、そんなこと出来たんだ。

カラム

お化けも進化するんだぜ。……おれも知らなかつたけど、こ

カラム

つち。

カラム

あ、ちよつと。

カラム

ミューについて、カラム、去る。

4

ロウとリリとランプ走り込んでくる。

ランプ

メーリノー。メーリノー。

リリ

こつちじゃないのかな。

ロウ

やつぱりカラムんちなんだよ。

リリ

(無視して) じゃ、今度は市場の方行つてみよ。

ロウ

ねえリリ。カラムんち行つた方が。

リリ

……カラムんち行つていいの？

ロウ

え。なんで。

リリ

何でつて。あんた、今まで一回も行つたことなかったでしょ。

ロウ

……そーいや。

リリ

避けてたんじゃなかったの？

ロウ

え。ぼく、もともと出掛ける方じゃないし。そーいや、今まで、行こうなんて考えもしなかった。

リリ

あたしは、……カラムとの思い出があるから、行きたくないんだと思つてた。

ロウ

まあ、……そりゃ思い出はたくさんあるけどさ。

リリ

吹つ切れたの？

ロウ

？ 吹つ切れたとかは、ちよつと違うけど。すぐ戻ってくるだろうと思つて。だから、わざわざ行く必要がなかったというか。

ランプ

リリ、だめ、ここにもいなそう。他探そ！

リリ

じゃ次は市場の方、行くよロウ。

ロウ

え、ちよつと、待つてよ。

ランプ、ロウ、リリ、去る。変わつて、カラムとミュー。

(急に立ち止まつて) あーつ、待つた待つた。

わーつとつとつと、なに。

これこれ。(仮面を出す)

何してんの。

ロウがさ、これがないと不安とか言つて。

なんか分かんないけど、ふーん。

そーいやミュー、さっきの髯、あれなに？ 昔はあんなのなかつたよね。

うん、……今は、あれが里の中心。

へー。あそこで糸紡いでんの。

うん……まあね。

へー。やつぱり中見たかつたなあ。あ、もしかしてロウもあ

そこに？

いや、……ロウはいない……たぶん。

ふーん。ロウは家でやるタイプかな。じゃあ誰がああ髯仕切

つてるんだろ。長老たちはもう歳だし、となるとあとは。

は！ これは、ロウのにおい！

へ。

(あたりを臭つて) ふんふん、ふんふんふん。ふん。こつち

だ。(駆け出す)

犬？ あんた猫でしょ？

わんわんつ。

ちよつとミュー？

カラム

ミュー

カラム

カラム

カラム

カラム 一応、ちょっとだけは持つてきた。どつかに埋めてあげな

やな。

え。

カラム 一年前に、ぽつくり。前の日までは笑つてたくせにぎー。

……カラム。

ミュー、カラムに抱きついて。

カラム おおつ、どした？

……おれがいるからな。おれはずつとそばにいるからな。

……ありがと。

……。

カラム よし、行こつ。ロウとメリノが待つてる。

うん。

カラム (前方に何か見つけて) ん？

どした、カラム？

カラム あそこ。あれなに。モッコモコの何かが動いてる。あれ、も

しかして。

ミュー メリノだ。

カラム なんでこんな町中に？

ミュー 分かんない、けど。

カラム 捕まえるよ、おいでミュー！

シレン、トット。

シレン 見失ったか？
トット どこ行つた？

ランプ、ロウ、リリ。

ランプ メリノおー！

ロウ メリノ！

リリ ちよつとまつてつ。

中央ですれ違つ3組。

ロウだけがカラムを見つける。

ロウがカラムの腕をつかんでいる。

え。

……その、……仮面。……なんで。

ロウ？ あ……！

(シレンを見つけて) 兄ちゃん。

イロハ出てくる。

イロハ シレンさん、作家さんがお話聞きたいつて……あれ、取り込

み中ですか？

……。

シレン、トット、ランプ、リリ、ロウ、イロハ、仮面のカラムを囲む。

カラム、おすおすと仮面を取る。

リリ カラム。
イロハ カラム。

ランプ
カラム姉ちゃん？

トット
カラム。

シレン
カラム。

ロウ
……カラム。

カラム
ども、皆さん、ひさしぶり。お元気？

膠着状態のその場。

と、そこに羊の長い鳴き声。

その場の全員が鳴き声のする方を向く。

カラム
え？

ごうつと、風が吹く。

カラム
わ……っ！

瞬間、その場の空間がゆがむ。

他の人々は、動かない。

遠くに、メリノが立っている。

メリノ
カラム。

カラム
メリノ！

メリノ
やっと帰ってきてくれた。カラム。

カラム
メリノ、お前……、(まわり見て)なんだこれ？

メリノ
カラム、お願い。助けて。

カラム
助ける？

メリノ
カラムがいない間、ずっと、ぼく、頑張ってきたんだ。けど、

もう限界。

何が？

もう、あふれそう。

どうしたの、メリノ。

一緒に来て。カラム。カラムの力が必要な。お願い。

いいけど、なあ、説明して。わたしには、何が何だか。

(動ける)カラム。だめ。行くな。

ミュー。

お前、壁のシミだったのに、なんで。

またどっか行くのか。おれおいて。

すぐ戻ってくるよ。

おれは、カラムが毎日楽しく過ごしてるだけで十分なんだ。

カラムが何したってかまわない。けど。おれ、それいっただけに

はついて行ってほしくない。

口出しするな。ただのシミのくせに。

お前だつて。毛の塊のくせに。

カラム。早く。ぼくと一緒に……(跪く)

メリノ！

時間が、動き出す。

カラム。

シレン。

シレン？ うわー、お前たくましくなったな。

何で戻ってきた。

え。

この里を捨てたやつが、何で戻ってきた。

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

ミュー

カラム

メリノ

ミュー

カラム

ミュー

メリノ

ミュー

メリノ

カラム

シレン

トット

カラム

シレン

カラム

シレン

カラム 捨てた、って。別にそんなわけじゃ

シレン じゃあ何でいなくなつた。

カラム だから、師匠に。

シレン おれが……、どんな思いで……。

カラム シレン？

トット カラム。一緒に来て。

カラム トット。

トット 見せたいものがあるんだ。今の里のこと。全部教えてあげる

よ。

カラム や、あの。今はちよつと。

ロウ だめだ。

リリ ロウ。

カラムは、ぼくのところにくるんだ。おかえり。

ロウ たいま。背伸びた？

カラムは相変わらずだね。

ロウも、相変わらず。ほつそい体。

うるさいな。いいだろ。

なあ、ちよつと手貸して。こいつ、うちまで運ぶの手伝って

よ。あれ？

メリノ、いつの間にかいなくなっている。

びゅううううう。風の音。

みんな、風にあおられて目をつぶる。

風、すぐにやんで。

何だ、今の。

あれー？ このリングゴ、毛が生えてる。(糸を手取る。

引つ張ると、するする、糸が紡がれる)……糸？

……！

シレン！

なに、これ。糸が。

トットさん、おれにも見えます、糸、あそこ、糸、ほら、糸、

あそこにも……糸。これつて。

……。

兄ちゃんだよ。これ。兄ちゃんが皆でやってる事だよ。

兄ちゃんが何かやったの？

おれじゃない。おれじゃない。おれじゃないよ。

シレン。

(カラムを見て) またお前だな、カラム。

え。

今度は何やった？ なあ、何やったんだよ。

カラムにつめ寄るシレンの胸元から、美しい紅い糸が伸びている。

それを見つめる、シレン。手に取ると、ほんのりあたたかい。

シレン……！

……。

シレン、それをそつとつかみ、

天へ向けて、するする引つ張り出す。

やめろ！

カラム、シレンに駆け寄り、

カラム

シレン

カラム

シレン

カラム

シレン

カラム

シレン

カラム

紅い糸をつかんでシレンの胸に戻す。
見えなくなる、紅い糸。

メリノの声が聞こえなくなる。
カラム、立ち尽くす。

シレン

はなせ、はなせ！（自分の胸を見る。触る。どこにも糸はない）……やつと、やつと見えたのに。

カラム

シレン。

シレン

……カラム。

シレンはカラムを睨み、

カラムはシレンを心配そうに見つめる。

張りつめた空気。

カラム

……。

シレン

……何しに帰ってきたかは知らないが、里を守るのはこのおれだ。この里に、もうお前の居場所はない。

トット

シレン、待って！

イロハ

あ、ちよつ……。

シレン、トット、イロハ、いなくなる。

里を見渡すカラム。その表情は、とても不安そうに見える。

いつのまにか、その場にいた人々も消えている。

ふと、カラムの耳にメリノの、声が届く。

メリノ

ごめんねカラム。紡がれた糸は二度と元には戻せない。始まつてしまったらもう、止めることはできないんだ。

カラム

なに。メリノ。……メリノ、メリノ？

紡ぎの砦。

作家、自分の手帳に器用にティーカップを乗せて登場。

作家

へー。これが、湖から紡いだ糸で作ったティーカップねえ。

イロハ

あああ、あの、危ない。

作家

(手帳ごとイロハに) はい。

イロハ

え。

作家

持つて。

イロハ

あ、はあ。

イロハ、手帳の上に乗せられたカップだけを受け取る。

作家、手帳を広げて何かを書き込む。

作家

(あたりを見て) ふんふん。(手帳に書き込む)

イロハ

あのー、えっと。(出て行ってもらおうとしている)

作家

なに。

イロハ

だから……。 (出て行ってもらおうとしている)

作家

なに。

イロハ

勝手に入ってこられるの困るんで。

作家

きみ、イロハくんだよ。

イロハ

あ、はい。

作家

(手帳をめくって) 染め屋イロハっていったら、そこそこ腕のいい染め屋じゃなかったっけ。なんでこんなところでコマ使

いさせられてんの。

別に腕はよくないですよ。

あれ、そうなの？

転職つすよ、転職。

ふーん、(書きながら) 絡まってんねえ。

は。

いや……。違う、「わ」が抜けてんだ。空回ってんねえ。

……！ いいから、出てってくださいよ！

そこへ、トットが入ってくる。

あ。

あ。

あ。

あ、すいません、すぐ追い出しますから。

作家、なんで入ってきてんの。

すいません、すぐ追い出しますから。

あ、トット、トット。(肩に何か見つけて手をのばす)

なに。

(取って) んー……。違った、ただの糸くずか。

なに。

紡がれてるのかと思っただけど。でも違った。

……。 (硬直)

お邪魔します。

作家、奥へ入っていく。

作家、奥へ入っていく。

ちよつと待って、イロハくん止めて。

あ、はい。

イロハ

作家

イロハ

作家

イロハ

作家

イロハ

作家

イロハ

トット

トット

イロハ

作家

トット

トット

作家

トット

作家

トット

作家

トット

トット

トット

イロハ

トット、イロハ、作家を追いかける。
舞台壇上、あかるくなる。

ここからはカラムの回想である。

師匠 カラム、おい、カラム！

カラム 師匠！

師匠が出てくる。追いかけて、カラム。

師匠 おーカラム、酒、持ってこい、酒。

カラム ないですよ、もう。あのね、わたし一人の稼ぎじゃ、毎日酒一本買うので精一杯なんです。たまには師匠も紡いでくださいよ。

師匠 分かつたらんの。それだからお前は、いつまでたつてもわたしのようになれんのだぞ。いいか、「素晴らしい紡ぎ屋」になるためにはな……。

師匠、滾々と紡ぎ屋の極意たるものを話して聞かせる。

カラム 師匠！ いい加減にしてください！ ていうか、飲みすぎです。そのうちほんとに死神に魂持ってかれますよ。

師匠 あほう、わたしは死神とは親友なの。

カラム ……わたしが何回死神追い返してるか知ってますか。

師匠 うーわ、出た出た。カラムの靈感あるんです自慢。うーわ。寝ろ。……もう寝てください。

カラム 師匠 いや、今日はお前が先に寝ろ。今日はわたしが、お前のあほ

カラム

うな寝顔拜んでから寝るのだ。

……分かりました。じゃ、わたし寝ますから。師匠も早く寝てくださいね。あーそれから、明日こそ、師匠も紡いでくださいね。約束ですよ。

師匠 おう、まかせとけつ。

カラム ……おやすみなさい。

カラム、寝る。

師匠、眠るカラムの横で鼻歌のように、詩を口ずさみ。

明けゆく旦（あした） ゆ くるくる廻りて
暮れゆく夕ぐれ 業（わざ） なし果てて
くるくる くるくる 糸 繰（く）る車
とくとく とくとく 糸 繰（く）る車
紡ぐは はじまり 紡ぐは 終（しま）い
もとには もどせぬ 糸 繰（く）る車
つむげや つむげ 糸 繰（く）る少女
二度とは もどせぬ くるくる廻（めぐ）れ

師匠、カラムを見やる。去る。

カラム、起き上がって。

カラム

その夜、わたしはとうとう死神に出し抜かれた。師匠の紡ぐ、誰より細くてキラつキラの糸を、その手触りを、もう一度だけこの指で確かめたいって思ってたのに。その願いは、二度と叶うことはなかった。

回想終了。

ロウ登場。場面はロウの部屋に変わっている。

ロウ あれ、リリどこ行つたんだろ。

カラム ……相変わらず、散らかってんなあ。

ロウ これでもちよつとは物どかしたんだよ。

カラム これで？

ロウ なんだよ。

カラム 全然変わってないね。(物を触つたら、埃が舞う)うはつ、

埃っぼい。

ロウ 帰ってくるつて分かつてたら、ちよつとぐらいは片づけたん

だけど。

カラム 別にいいよ。

ロウ ぼくだつて、もうちよつとくらい片づけられるよ。

カラム 麻の糸、綿の花、繊維の甘い匂い。ロウの部屋だ。

ロウ ……。

カラム 違つた、メリノだよ、メリノ。ねえロウ、メリノは……？

と、リリが入ってくる。

リリ カラム。

カラム

リリ。どこ行つてたの？(リリの手元のピアノを見て) それ。

ロウ せっかくカラムが帰つてきたから。

リリ、小さなピアノをポロン、と弾いて。

リリ

カラム何聞きたい？ あたし弾くから隣で紡いでよ。ロウも一緒に。

カラム ……リリ。嬉しいんだけど、その前にわたしき。

リリ、音楽を奏で始める。

聞いている、カラムとロウ。

リリ ねえ。カラムは、この6年どうしてたの？

カラム え。……いろんなところを、転々と、かな。師匠の気の向くま

まに、糸紡いで、売つて、稼いで。師匠は修行だーとか言っ

てたけど。

リリ 楽しかった？

カラム うん、そうだね。大変な事もあつたけど。楽しかったかな。

リリ 里の事は？ 思い出すことあつた？

カラム 少しは。でも忘れてた時の方が多かつたかも。

ロウ えー。ひどいなあそれ。

カラム いや、ロウも旅したら分かるつて。結構忙しいんだから。

リリ そっか。忘れられちゃうんだ。

カラム いや、リリも旅したら分かるつて。糸紡いだり、師匠の世話

したり。

リリ じゃあ、6年前のあの日のこと、まだ覚えてる？

カラム え。

リリ 6年前、カラムが里を出た、あの日のこと。

カラム うん。リリとロウが見送つてくれた。ちゃんと覚えてるよ。

リリ じゃあ、どうして出て行かなきゃいけなくなつたのか、覚えてる？

カラム それは、師匠に言われて。

リリ そうじゃなくて。

カラム そうじゃなくて？

リリ 出て行かないやいけなくなった理由。

カラム そんなの……あつたかな。だいたい、出て行かないやいけなくて。

リリ ……カラムまで隠すの？

カラム え？

リリ だって、ないはずないじゃない。だって。ロウから、言葉が消えてるじゃない。

カラム なに。言葉？

リリ カラムがいなくなつてから、ロウ、あんなに大切にしていたカラムの事をほとんど話さなくなつた。カラムがいなくなつたのに、一言だつてさみしいと言わずに、ただ毎日、ぼんやり糸車回してた。あたし、喧嘩でもしたのかなーって思つて、ずっとそんなロウのそばにいて、ずっと話してくれるの待つてた。けど。

カラム リリ。

リリ ロウは少しも話してくれないんだもん。友達なのになーなんて、思つたりした。けど、そのうち、なんかおかしいなーって思うようになった。ロウは話さないんじゃない。話せないんじゃないかって、カラムが、ロウから大事な何かを持つてつちやつたんじゃないかなって、思うようになった。

カラム リリ。ごめん。リリ。ありがと。いっぱい思つてくれて。

リリ カラム。

カラム わたしもただけどき、ロウも口下手だから、リリばっか不安にさせたよね。なんにも不安に思うことなんてないんだって。だって、実はわたし、ロウから手紙もらつたんだ。これ。だ

ロウ から戻つてきたんだ。

カラム ほらこれ。

ロウ その手紙。

カラム 封するの忘れただろ、ロウ。

ロウ ぼく、出してないよ。

カラム ……へ？

ロウ 書いたけど、出せなかったんだ。

カラム でも、ほら、これ。(仮面を出して)

ロウ うん、ぼくの仮面。カラムも知つてるでしょ、昔、鬼ごっこで使つてた。

カラム あ。そういえば。

ロウ カラムとぼくでおぎけて作つたやつ。世界に二つとない仮面ランプがどこかにしまつて、どこ行つたか分かんなくなつてたのに、何でカラムが持つてたの？

カラム いや、それは、だから。

リリ ねえカラム。やつぱりおかしいよ。はぐらかさないで教えてよ。なんで急に里から出て行つたの？ なんて戻つてきたの？ ロウからなにを抜き取つたの。抜き取るつて、わたしそんなこと。

カラム カラムの前に、ロウ。

カラム ロウから「何か」が出てくるような気がする。

ロウ 怖くなって、ロウから離れて。

カラム 何も、何もしてない。

ロウ カラム？

リリ

ねえカラム、あたしはただ、昔に戻りたいだけなの。昔の穏やかだった里に。進んだ時計は巻き戻せない。けど、音楽は何度でも繰り返し奏でることが出来る。昔のことも一緒に引き連れて思い出させてくれる。だから。思い出して。教えて。そうすれば、きつと昔みたいにな。

べつに、思い出すことなんか。

カラム！

ねえリリ。師匠が言っていた。紡いだ糸は、元の綿に戻すことは出来ない。糸だけじゃない。どんなことでも、きれいに元通りに戻すことは出来ない。だから、わたしが出て行ったことで、何かがおかしくなっちゃったんなら、ごめん。それはもう元には戻せない。けど、今からだったら作りなおせる。それじゃだめかな。

じゃあせめて、ロウに返してあげて。

そう言われても。わたし、どうしていいか。

ねえリリ、何の話してるの？

ロウ。

心配しなくても、別にぼく、カラムに取られたものなんてなにもないよ。逆にぼく、カラムに謝らなきゃいけないことがあるくらいで。

え、なに、それ？

覚える？ カラムが里を出る前の日、ぼくに、プレゼントくれたこと。

……プレゼント？

あれ、ひどいなあ、それも忘れたちやっただの？

……わたしが、ロウに？ プレゼント？

そう。あんなの今まで見たことないよ、とつてもきれいで真

つ赤な。

カラムの中で、何かのヒビが入る。

カラムの目の前に、何本かの糸が見える。他の者には見えない。

なにこれ。

どしたの？ カラム。

ごめん、わたし、ちよつと。……ごめん。

カラム！

カラム、その場から逃げるように駆け出す。

変わって、シレンがいる。作家もいる。トット、イロハ。

うわー、この部屋も外と一緒だ。こりゃあ大変だ。

作家……。

シレン、ごめん、すぐ追い出すから。

なんで入れた。

勝手に入ってきちゃったんです。

だって、扉なくなってたから。扉だけじゃないよ、里のいろんなものが、誰も何にもしてないのに、紡がれ紡がれて糸に変わってる。シレン、早く止めないとやばいよ、これ。分かってる。

じゃあどうするの。

あんたに話すことはない。

そう言われても、わたしは作家だ。きみたちのように紡ぐことも、編むことも、染めることも出来ない代わりに、書くことが出来る。この状況、書かないわけにいかないだろう。

シレン
なにが作家だ。里であつたことを、書き留めることしか出来
ないくせに。

作家
でもそれは、里が始まった時からずーつと続いている尊い作業
だ。先代から譲り受けて、その先代も先代から譲り受けて、
どんな時でも、やめるわけにはいかないよ。

トット
作家
いいから、今ちよつと立て込んでから後にしてよ作家。
で、どうするつもりなの、シレン。
なにか。

作家
シレン
まさか、この里を紡ぎ直して、作り直そうとでも思つてるの。
だつたらどうなんだ。

作家
シレン
きみはそんな器じゃないだろう。
は？

作家
シレン
分かつてるんだらう？ きみは二番手だ。きみにそんな力
はない。

作家
シレン
なんでそんなこと。
多分。帰ってきたんだらう。カラムが。

作家
シレン
え。
そしてカラムなんだらう、この引き金を引いたのは。あの時
と一緒だ。いや、今もずーつと、きみはカラムに引き金を引
いてもらい続けている。それを超えられないでいる。

作家、シレンの片手に付けられた手袋を見、示す。

シレン
……！（手袋を隠す）

作家
ここに入らせなければ、見せなければ分からないとでも思つ
た？ わたしは作家だ。作家はね、想像することができ
るんだよ。

シレン
作家

お前に何ができる。

お前に何ができる。シレン。カラムに言つて止めてもらえ。
この現状を。このままだと、里は本当に全部糸になつて影も
形もなくなるだろう。止められるのはきつとカラムだけだ。
そしてきみにも少なからず責任がある。もちろん始めたのは
きみじゃない。けど、続けたのはきみ。責任は同じくある。
責任が同じくあるなら、おれがその責任を取る。

あのねえ……。きみに出来るなら、最初からそうお願いして
るよ。きみは里をまもりたいの？ それとも里を壊したい
の？

やめろよ！

……トットさん？

シレンが今まで、どれだけ頑張つてきたか知つてんのか！
お前のそんな軽々しい言葉で傷つけられていいはずない！
決められていいはずない！ シレンはあの時、この里を、み
んなの里を守るの自分しかないつてそう思つて、今まで
ずっと一生懸命頑張つてただけなんだ！ シレンは二番手
じゃない。カラムの代わりじゃない。シレンはシレンだ。あ
んなたなんか、言葉で、縛り付けられるなんてまっぴらご
めんだ！ 消せよ、今の言葉、そこから全部消せよ！
おーい、ちよつちよつと、やめろつて。

シレン
トット

トット。
大丈夫、わたしがシレンを守つてやるから。わたしはシレン
を守るから。出て行けよ。シレンが、この里を守るつて決め
たんだ。だつたらこの里を守るのはシレンだ。誰も口出しな
んかできないんだ！

沈黙。しかし。

……で。里を自分たちの都合いいように変えてくわけだ。

……え。

いいんすよ。里が発展していくことは、いいことだ。けど、それによつて潰されるやつもいる。そこだけ分かつといて下さいね。

イロハ……。

早めに見切り付けたんすよ。必要なくなるでしょ、おれの仕事。シレンが紡ぐ糸には最初つから色がついてるし、その方が面倒なくなるから里の人間はありがたがるし、何より、普通に紡ぐより断然早いし、おもしろい。だから、今や里の大半が普通に紡ぐのをやめちまつてる。結果染め屋は、おれの仕事は終わる。

皆

……。

おれがやつてきた事は死ぬわけです。死にゆく技術を持つやつのが持ち。まああんたたちにはやあ、分かんないだろうけど。イロハ……。あかし、

いいんすよ。コマ使いでも何でもしますよ。だから。トット

「さん」、「シレン」さん、「雇い続けて下さいね、おれのこと。

イロハ。

はい？

……おれ、……イロハの染める糸、……好きだ。

……！！……へえ、それで？

……おれ……、……やめてほしくない。

じゃあ？ どうすんの？

……。

イロハ

適当なこと言うのよしましよ！ 曲げるつもりなんてないんではよ。だつたら変に気を持たせること言うのよしましよ！ よくあるやつじゃないすか、ねえ、里のためとか言つて、結局自分のためつてやつ……、

と、そこへ突然。ランプが駆け込んでくる。

イロハの背中に激突する。

ぐるぐるぐるぐる、つどーーん！

ぐつはあ！

ランプ。

おー、やつほー作家！ あ、にいちゃん、よかつたーやつぱりここにいた。ちよつと、一緒に来て来て。

え、なんで。

(シレンの手を引つ張るが、動かない) うう……重い……動かん。にいちゃん、里が何か変なことになつちやつてんの。

……。

よーし、引いてもだめなら、体当たりっ。

ランプ、体当たりしよつと距離を取る。

と、イロハを事故で踏んずける。

いーたいたい痛い！ 踏んでる！ 踏んでる！

うへ？ あーごめんごめん。だじよぶ？ ケガした？

いや、大丈夫、だけど。

よかつたー。けどさ、(カッコつけて)職人の体は商売道具、きつちり自分で守んなきゃな。イロハ。

イロハ ……

作家 なあランプ、わたしと兄ちゃん、今大事な話をしてるんだ。子供はちよつと外で遊んでようか。

ランプ あたし子供じゃないよ。

作家 んー、まあ別にわたしはいいんだけどさ、きつと兄ちゃんが嫌がるんじゃないかな。

ランプ だいじょうぶだよ、うるさくしないもん。

作家 そういう問題じゃないんだけど。

ランプ けどさ、作家も早めに切り上げてよね。後がつかえてんの。後って。

作家 (シレンに) 兄ちゃん。みんな待つてるんだから。みんな？

ランプ 里のみんな。あたし頼まれたんだ、早く兄ちゃん呼んできてくれーって。

シレン え。

トット 里のみんなが、シレンを？

ランプ うん。兄ちゃんならきつと何とかしてくれる。里を守ってくれるからってみんな言うから、だから呼びに来たの。失礼しちゃうよねー、すべての妹が兄貴の居場所把握してるわけじゃないっつうのー。ま、うちの場合はだいたい分かるけどさ。

シレン ……。(行こうとする)

作家 行つてどうすんの。

シレン ……。

作家 ランプも、里を守るんだつたら師匠呼びに行きやあいいのに。いつつも師匠師匠言つてたくせに。

ランプ この後師匠も呼びに行くよ。

作家 うーん、どちらもつてのはたぶん、面倒なことになると思う

よ。

ランプ なんで。兄ちゃんと師匠友達でしょ？

シレン ……。

トット ……。

イロハ ……。

作家 んんー？ ねえ、ちよつと待とうかランプ。きみは、どっちの味方なの。

ランプ はえ？ みかた？

作家 きみは今、ロウを師と崇めて、ロウがやっていることを習おうとしている。それって、兄に対しての反抗なんじゃないの？

ランプ あー……………え、なに？ もつかい。

作家 いや、だから……………。きみは、兄ちゃんが今やっていることに反対だから、ロウのところに行つてるんじゃないの？

ランプ あー？ なんで。

作家 え。

ランプ イヤとかないけど。

作家 バカなふりして、隠す必要はないんだよ。

ランプ バカ？

作家 ん？

ランプ バカつてなんだこらバカー。

作家 そこ？

ランプ バカつていう方がバカなんだぞバカー。

作家 ああもう、悪かったよ。

ランプ んーああ、分かんない。作家が、言わんとしてることが分かんない。

作家 もう分かった、もう(いい)——

ランプ でも、分かる事はあるよ。あたしは、師匠の糸も、兄ちゃん

トット
シレン
トット
イロハ

シレン。
トット、イロハ。
……
……

ランプ
シレン
ランプ

ランプも？
うん。
分かった、じゃ、またあとでね。
ランプ、去る。

作家

……さて、続きはどうなる。なあ、カラム。

作家、ペンを握る。

ランプ
シレン

ランプも？
うん。でも、できるだけ全力で、みんなを守るから。もうちよつとだけ待ってろって、里のみんなに言つといてくれるか。わかった。兄ちゃんは、一緒に来ないの？
兄ちゃんは、……みんな呼んでくるから。みんないれば、きつとなんとかなる。

シレン
ランプ
シレン

作家

……
ランプ。
なに、兄ちゃん。
兄ちゃんな……ごめん。兄ちゃんの腕じゃ、里守れないかもしれない。

作家

……はーあ、どうすんのかねえ。(手帳に記して)里に異変。

シレン、トット、イロハ、去る。作家、残って。

シレン

ついでこい。

変わって、カラム。
里を見渡して。

カラム
なにこれ、どーすんのこれ。里が全部糸になっちゃったら、
どうやって戻すの？ ていうか、これ、戻すの？ とにかく、
メリノ探そ。家に帰ったらきつと。……え、あれ、嘘。

カラム。目の前の景色を見つめる。

見覚えのある風景なのに、そこにあるはずのものが見当たらない。

カラム
(見渡して) 更地………。誰だ、許可なく勝手に取り壊し
たのはっ！

間。ここは、カラムの家があつたはずの場所。

カラム
……わたしの家、なくなっちゃった。そっかあ。へへへ。

カラム、更地を見つめる。
と、そこへ変な4人組が現れる。

壁1
あーっ、カラムさんだ。

壁2
カラムさんだ。

壁3
おー、カラムさんじゃん。

壁4
カラムさんチーッス。

壁1
え。なに、なにに？

壁2
うーわ、何年ぶりっすかー。

壁3
なっつかしー。

壁4
全然変わってねー。

壁3
おいダメだつて変わってねえは。相手はレディなんだからよ。

壁4
あそつか。大人っぽくなつたぜ。なっ。

壁1
わざとらしいなーおい。

壁2
お前ら、もしかして。

壁1
おれら壁つすよ壁。覚えてます？

壁2
バツカヤローが、カラムさんが忘れるわけねえだろーおれら

壁1
のこと。

壁4
覚えてるよ、もちろん覚えてる。うちの家の壁だ。けどお前ら。

壁1
そーなんすよ。カラムさん、申し訳ねえつす。

壁2
おれら、取り壊されちまつたんす。

壁3
やー抵抗したんすけどねー。

壁4
え、お前抵抗なんかしたっけ。

壁2
ま、出来なかつたっつーか。

壁1
で、取り壊されちまつたんす。家ごと全部。

壁3
もー痛つてーのなんのつて、なあ。

壁4
もつと丁寧に壊せつーんだよ、なあ。

壁1
見てこれ、壊された時に出来た傷。(指の先つちよ、さかむ

壁2
けくらい) ほら。

壁4
うーわ、まじでー。超痛そー。

壁1
でも、なんでお前ら。

壁2
あーおれら、残留思念つてやつつす。
そーそー、もう目に見える壁はないんすけどね。

壁3 おれら意識だけ残ったっつーか。
壁4 なんっつーか、おれら意識高い系の壁だったんで。
壁1 他の壁とは格が違うっつーか。
壁2 死してなお主を待つっつーか。
壁3 まって、おれらマジかつこよくね？
壁4 かつこよくね？
壁たち ふーうっ。
カラム そうなんだ。
壁1 あ、ほらあいつ、あのネコだけは壁ごと持つてかれちまったんすよね。
壁3 そーそー、そこから行方不明になっちまったんだっけか。
壁4 あいつ、今頃どうしてるかなー。
壁2 燃やされてなきやいいけどなー。
カラム ミューには会ったよ。元気だった。
壁3 (嬉しそう) まじっすか。しぶといなーあいつ、ただのシミのくせに。
壁1 (嬉しそう) まあでも、無事でよかった。
壁2 (嬉しそう) だな。
壁4 (嬉しそう) うんうん。よかったよかった。
カラム 守れなかったのは、わたしのほうだな。みんな、ごめんな。
壁1 え。
壁2 あ。
壁1 いやいやいや、いーんすいーんす。
壁4 そーそー、いーんすよ。
壁1 おれら、ゆくゆくは絶対壊される運命ですし。
壁3 別にそれがいやってわけじゃねーんです。
壁2 ほら、達観してるっつーか。

壁4 運命を受け入れてるっつーか。
壁3 まって、やっぱおれらかつこよくね？
壁4 かつこよくね？
壁たち ふーうっ。
カラム お前ら。
壁1 でも、早めに帰ってきてくれてよかったつす。
壁2 そーそー。
カラム なんて。
壁3 いや、実はさすがのおれらもそろそろ消える5秒前だったんすよねー。
壁4 そーそー、まさにセーフ、ギリギリセーフ。
壁2 もーヒヤヒヤしたんすから。
壁3 そーそー。あれ渡せないとかさすがにないわーって。
壁1 やー、ほんとによかった。
壁4 よかったよかった。
カラム 渡す？ なにを？
壁3 あ。
壁1 やっべ、ほら、これだよ、この反応。
壁2 やっぱあれ、サブライズなんじゃね？ 師匠の。
壁3 まじで！ やっべ、おれ言っちゃったし！
壁4 おまえ、バカ！ ほんとバカ！
カラム 師匠の、なに？ お前ら、何か預かってんの？ 師匠からあれつす。
壁1 4人が指す方向には、光る地下へ続く道がある。
カラム 地下室？ え、うちにこんなのがあったっけ。

壁2 隠してたからな。

壁3 そーそー。

壁4 頼まれてたんす。師匠に。

壁1 もしも万が一。

壁2 カラムさんがこのうちに帰ってくるのがあったら。

壁3 絶対にこれを。

壁4 「隠し通せ」って。

カラム ……え？

壁1 でもおれら、

壁2 もう消えますから。

壁3 隠し通せなくなるくらいなら。

壁4 教えちまおうって。

壁1 そしたら、入るも入らないも、

壁2 カラムさん次第っつーわけで。

壁3 完全に消えちまう前に、

壁4 ちゃんとカラムさんに伝えられて、よかつたつす。

そこへ、ミューが出てくる。

カラム。

ミュー。

壁1 あ。あいつ。

壁2 壁のシミの猫だ。

壁3 まじかよ、あいつ自由に動けてやがる。

壁4 かつけーなおい。

壁1 あれが進化か。

その言葉を最後に、壁たちは石のように動かなくなる。

入んの、それとも、やめとく？

わたしは。

おれはいいと思うよ、カラムが選びたい方を選べばいいと思

つてる。おれはカラムに会いたかった。カラムの声が聞いた

かった。けど、もしも万が一、カラムが辛い思いをする事が

ここにあるんなら、おれ、もう二度とカラムに会えなくなつ

ていいと思つてた。

ミュー。ありがとう。

カラム。

わたし、行ってくるよ。

……。

師匠のやつ、何を隠してたのかしんないけど、師匠の忘れ物

は、弟子がちゃんと処分しなきゃな。

カラム。

なあに。

おれ、ここで待つてるからな。おれは、カラムの家にできた

壁のシミの猫。カラムのちっこい背中がもたれかかつてきた

つて、おれはびくともしないからな。だから……！

ありがと。ここで待つてて。すぐ戻ってくるから。

カラム、地下室へ消える。

ミュー、立ち尽くす。

カラム……！

ミューは、カラムをじっと待つ。

地下室を進んでいたカラム、広いところに出る。
あたりを見回して。

カラム
ここ、どこだろう。うちの地下にこんなところあったんだ。

と、軽快に明るい女性が出てくる。

銀行員
いらつしやいませー。「ヒミツギンコウ・カラムシテン」へ
ようこそ。

カラム
へ、あ、どうも。

銀行員
本日はどういったご用件でしょうか？

カラム
えっと。

銀行員
お預け入れですか？ お引き出しですか？ それとも、新し
いお口座開設いたしますか？

カラム
え。

銀行員
ですから、お預け入れですか？ お引き出しですか？ それ
とも、新しいお口座開設いたしますか？

カラム
あ、のつ。師匠が、ここに何かを置いて行ったと思うんです
けど。

銀行員
師匠様、の、お口座からのお引き出しでお間違いないでしょ
うか？

カラム
え、あ、は……い。

銀行員
かしこまりました、こちらの1番の番号札でお待ちください

カラム

銀行員

カラム

銀行員

カラム

銀行員

カラム

銀行員

カラム

銀行員

カラム

銀行員

カラム

銀行員

カラム

銀行員

カラム

銀行員

カラム

銀行員

カラム

銀行員

ませ。

はい。

(すぐに) 1番の番号札でお待ちのお客様。

はい。

お待たせいたしました、番号札お預かりいたします。

はい。

確認致しましたところ、師匠様、のお口座の内容ですが、確

かにお預かりしているものが一点ございました。えー、失礼

ですが、お客様はご本人様でしょうか？

あ、違います。

では、ご親族様でしょうか。

いや、あの、弟子、なんですけど。

弟子、様。では、身分証明書などはお持ちですか？

い……い……い……

委任状などは。

いいえ。

失礼ですが、お通帳はお持ちですか。

おつうちょう？

ではカードは、ご印鑑は。

持ってません。

申し訳ございません。そういたしますと、師匠様のお口座か

らのお引き出しはいたしかねます。

え、あ、あの、多分なんですけど。

はい。

預けてるもの、わたしに関する事だと思っんです。

申し訳ございません。いかなる場合でありまして、ご本人

様の許可のないお引き出しはいたしかねます。

カラム

そこをなんとか。

銀行員

申し訳ございません。

カラム

頼むよ、お姉さん。

銀行員

申し訳ございません。(時計を見て) ハッ！(にっこりと) 窓口終了10分前でございます。またのご来店をお待ちしております。

カラム

ちよつと待つて。

銀行員

お客さま、閉店でございます。

カラム

待つてつて。

銀行員

閉店でございます。

カラム

融通利かないな。

銀行員

お役所仕事でございます。

カラム

だから、死んじやつたの。去年。

銀行員

……お亡くなりには？

カラム

突然、ぼっくり。流行り病で。昨日まで酒飲んで笑ってたのに、翌朝起こしに行ったら、ベッドの上で気持ちよさそうに死んでた。

銀行員

なるほど、そういうことでございますか。

カラム

え。

銀行員

本来でしたら然るべき手順を踏んで申請していただくんですが、お客様。

カラム

はい。

銀行員

失礼ですが、その中に、お通帳をお持ちでいらつしやいます

カラム

ね。

カラム

え。

銀行員が指すのは、カラムのリュック。

カラムには覚えがない。

わたし、そんなの、預かった覚えはないけど。

失礼致します。

銀行員、カラムの後方に回り、

リュックの口から白い糸をすーっと引き出す。

え。

え。

ほら、やつぱり。紡いでいらつしやいますね。細くて真っ白な、骨の糸。わたしども、このような美しい骨の糸を目にするのは初めてでございます。師匠からお紡ぎになられたんで

しょう。こちらで十分でございます。

これで、いい？

十分でございます。紡ぎ屋カラム様。ヒミツギンコウ・カラムシテンの威信にかけて、誠心誠意、お返しいたします。

転。

舞台上に、記憶の糸が舞う。

その糸は、師匠が大切にしまっていたもの。

これは……。

糸がほどけ、風景が見えてくる。

鬼ごっこをする、仲間たち。

シレン、ロウ、リリ、イロハ、トットが出てくる。

皆、少し幼い。

シレンがイロハにタッチ、鬼が変わる。

イロハがリリをタッチし、鬼が変わる。

リリ、トットをタッチ。鬼が変わる。

トット、ロウをタッチ。鬼が変わる。

全員が、それを見つめるカラムを見る。

ロウ、カラムをタッチ。鬼が変わる。

いつの間にか、カラムも記憶の中のカラムと同化している。

カラム。

なに、ロウ。

ぼく、かあさんに教わったんだ。

なにを？

カラムをぼくんちの子にするには、カラムをお嫁さんにもら
つたらいいんだって。

カラム

ロウ

カラム

ロウ

なにそれ。お嫁さん？

うん。カラムは師匠と二人暮らしで、いつも師匠のお世話
ばかりで大変そうだから、ぼくんちに来れば、もつと楽で
きるよ。

あー……、そうだよ、ロウのお母さんの作る料理、全部お
いしいもんね。

うん。母さんの料理毎日食べれるよ。一緒に寝て、起きて、
ごはん食べて、紡いで。父さんと釣りして、母さんとクッキ
ー焼いて、ぼく、カラムがうちの子になったらどれだけうれ
しいかなあつて思うんだ。それにぼく、……カラムが好きだ
よ。

？ うん、わたしもロウが好きだよ。

……そうじゃなくて。

なに？

カラムの鈍感つ。

ま、師匠のこともほつとけないしね。

飲んだくれなのに。

でも、腕はぴか一だもん。もつとたくさん教えてもらわなき
や。師匠の糸みたいなの、すごい糸を、わたしもいつか紡ぐん
だ。

カラムはやつぱりすごいなあ。里のみんなも、カラムはすご
いっていうよ。

うそだ、まだまだだよ。

ぼくも、カラムの糸が好きだよ。リリも、イロハも、トット
も、シレンも、みんなカラムの糸が好きっていうもん。

シレンは嘘だね。あいつわたしの糸に文句はっかかりつけるし。
それに、あいつのどこにまでもまつすくな真面目な糸、わたし

にはあんな糸たぶん紡げない。あいつの方がきつとすごいよ。
カラム。

なに？

ぼくの糸は？ ぼくの糸は好き？

ロウの糸？ ロウの糸は――。

ねえカラム、ぼく、ぼくやつぱりカラムのことが。
待つて。

なに？

動かないで。

え、なに？

なにこれ……。 (ロウに近づく)

ち、近いよ、カラム。

静かに。……なにこれ。ロウの目から、何かが。

カラム、ロウの目元からのびる紅い糸に触れる。それを、紡ぐ。

その糸は、とても美しく、あたたかい。

紅い糸は、どんどんロウから紡ぎだされ、

やがて、ロウの中のすべての紅い糸が紡ぎ終えられてしまう。

いつの間にか、カラムの手元には紅い手袋。

カラム

わたし、編み屋じゃないから下手くそだけど、手袋編んだんだ。よかつたら、もらつてくれないかな。それで、昨日のことなんだけど。わたし、よく分かんないけど、まあ、いつかはさ、ロウのお嫁さんになつてもいいかも。

ロウ

カラム

わあ、きれいな紅い手袋、これ、カラムが編んだの？

カラム

ロウ

カラム

ロウ

カラム

ロウ

カラム

あの。

紡ぐ以外不器用なカラムが、手袋ねえ。でも、片一方しかないね。

いね。

それは、糸が、足りなくて。

足りないなら紡げばいいのに。何から紡いだの？ ぼくも手
伝おうか。

それは……。

カラム？

……ロウ。

カラムには分かる。ロウから「ある心」がなくなつてしまった事が。

カラム、その場から逃げ出す。道すがら紅い手袋を落とす。

シレンが、その紅い手袋を拾う。

……。

紅い手袋に心奪われてしまふ、シレン。

シレン、紅い手袋を懐に隠し、去る。

カラム駆け込んでくる。

カラム

師匠、メリノ、わたし大変なことしちゃったかも。どうしよう、どうしよう。あの糸、ロウに戻したい。分かつてる。紡いだ糸は元に戻せないのは知つてる。でも……でもわたし、

心を乱すカラムの前に、メリノと師匠登場。

二人、カラムに手を伸ばす。

二人の手が交差し、師匠の手がカラムの首元から、糸を紡ぐ。

メリノ

メリノはそれを見つめ、カラムから紡がれた糸を師匠から受け取る。

師匠、放心し立ち尽くすカラムの手を引き、去る。

銀行員登場。メリノ、銀行員に糸を渡す。

銀行員は地下室へと消えていく。

メリノ、それを見つめている。

…大丈夫、カラムがいない間、この里はぼくが守るよ。

メリノ、去る。

トットとイロハ出てくる。追ってシレンも。
カラムの家の跡地。

ねえイロハ、ここどこ？

どこでしょう。

どこでしょうじゃないよ。あんたロウんちよく行ってたんじやなかったの。

そうだけど、こうも景色が変わっちゃ、わかるもんもわからないというか、あ。

なに。

あつちは確かリリんちのはずだから。ということば。

リリんちだけは分かるんだ。

あーまあ、そりゃあの、なんというか、へへへ。

気持ち悪い。

気持ち悪いって。

イロハももうちよつと健全だったらいいんだけど。

えー、なにになー。

根暗は嫌われるよ。

ぐっ。

うん、根暗は嫌われるな。

シレンさんまで！

と、そこへリリとロウが現れる。

ロウ

トット

イロハ

リリ

ロウ

トット

リリ

トット

ロウ

シレン

リリ

シレン

あ。

あ。

リリ。

イロハ。

なにやってんの、こんなところで。

そつちこそ、なにやってんのこんな時に。

カラム探してるの。

カラムを？

なんか分からないけど、話したら家飛び出しちゃって。

おれも一緒に探す。

シレン。

おれも、カラムに用があるんだ。その代わりに、っていうわけじゃないんだけど。手を貸してくれないか。里を守りたいんだ。頼む。

シレン、頭をさげる。

それを見て、トットもさげる。イロハも。

頼む。

お願いします。

……。

ロウ。

何やってんのシレン。みんな。手伝わないわけないだろ。でも、里を守るって、どうするつもりなの？

分からない。

さつき試しに、紡がれた糸を編み直してみたけど、元には戻

ロウ
じゃあ、どうしたら。
あんたたちが変なことしたから、こうなったんじゃないの。
え。
リリ。
あんたたちが、いろんなものから糸紡ぐなんてことやり始め
なかつたら、こんなことにならなかつたんじゃないの。それ
なのに、手を貸してなんて図々しいと思わないの。
リリ、それは。
ごめん、リリ。そうかもしれない。図々しいのは分かってる。
けど、手を貸して欲しいんだ。
リリ。
リリ。
最初つから変だと思ってたのよ。あんたたちのやり方。あら
ゆるものから糸を紡ぐなんて、そんな、非常識なこと。
リリ！
なによ、イロハ。
今はそんな、悪態ついてる暇ないだろ。
なによ、イロハ。
ここはみんなで協力して、里を守らなきゃ。喧嘩は後でいっ
ぱいしたらいいんだから。
なによ。分かっているわよそんなこと。イロハのくせに。
……あ、いやでも。イイかも。
は。
悪態つくリリ、ちよつと萌え。
気持ち悪い。
ぐーっ。

トット
とにかく、考えるまえにまず行動！ シレン、どうしようか。
カラム探す？
と、そこへ突然出てくるミュー。
……うそだろ。こいつら、カラムの友達だ、カラムの友達だ！
お前ら、カラムに会いにきてくれたんか！
え。
こいつが、リリ、こいつがシレン、トット、そして、ロウ。
うれしいよ、おれ、カラムは嫌われちゃまったんだと思つてた
から、うれしいよお。あ、カラムな、(地下室の入り口を指
して)ここに入つてつたんだ。おれも今から行くから、なあ、
一緒に来てくれよ！ ……つて、何やつてんだろおれ、聞こ
えるわけないのに……。
(ひとしきり見て、シレンに) ……見えてる？
え。
……うん。
え！
え、なにこれ、かわいいー。
え。
やーん、猫がしゃべってるー。
え。
かわいいーいー。
シャーッ。
ぐうっ。
な、な、な、何だこれ、カラム、カラムーっ。

三人

ロウ

シレン

ロウ

シレン

ロウ

シレン

ミュー、地下室へ逃げ込む。

かわいいー。

ねえ、カラム、この中だつて。行く？

……行こう。

うん。

ロウ。

なに、シレン。

ありがとう。

こつちこそ。さ、急ごう。

5人 地下室へ入っていく。

メリノ。地下室のどこか。歪み始めている。

メリノ

人はナイフで紙を切る。ごく当たり前のこと。けどどうして、ナイフで紙が切れるのか、分子レベルでは本当のところは分からない。どうして羊の毛から糸が紡げるのか。繊維の一本一本に撚りをかけて、どうしてそれが戻らないのか。それは、考えれば魔法みたいなことだ。

ぼくはただ、羊のやわらかな毛並みの先から、金色の光る何かを見つけただけだ。ゆつくり引つ張ると、それは糸になって、楽しくて、面白くて、ぼくは他にも見つけられないかって、方々を探し歩いた。白いふわふわした花から、虫が作った美しい繭から、植物の茎から、光る何かが出てるのを見つけた。とつても楽しかった。光る何かを見つけられる人を、皆は紡ぎ屋と呼んだ。

ある紡ぎ屋は、言葉紡いだ。キヌ、アサ、コットン、彼は名前を付けた。どんなものにも、人の心に芽生えた気持ちでさえ、糸が見えると彼は言っていた。ある紡ぎ屋は、歴史を紡いだ。ぼくらがここで何を始めたか、彼女が紡ぎ始めた言葉は、今でも紡がれ続けて、今では世界で一番長い糸になっている。ぼくはいろんなものに撚りをかけた。なんでも紡げた。どんな不思議なことでも、ぼくが紡いだら、全部本当になった。

でも、不安だったんだ。ぼくらが見た昔の世界はなくなった。

何かが出来たせいで、その何かに縛られた。新しいものは、古いものを殺した。ぼくらがやったことは、正解だったのかなあ。もしも、一番最初に戻せるって言われたら、ぼくはどうするか。

カラムがやってくる。

こんなとこにいたんだ、メリノ。カラム。何できみは、ぼくと話が出来たんだろうね。思い出したよ。わたし、なんで里を出て行ったのか。そうか。

メリノはこの6年なにしてたの。変わらないように願ってた。里がどんどん変わってしまったように。毛の中にきつかけを集めて隠してた。だから、誰にも毛を刈らせなかったんだ。

……。

今、里で起こってる事は、メリノの作業なの？ 始めたのは、カラム。

え。

きつと、可能性なんて誰にでもあったんだ。ぼくがそうだったように。毛の中から溢れて、里をおかしくさせてしまったのはぼくだけだ、始めたのはカラム。

はじめたのは、わたし。

あの手袋が、はじまりの合図。

……。

ぼく、里がどんどん変わっていくのが怖かったの。これ以上、昔の景色が死んでいくのが。

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

カラム
だから、呼んだのか。
帰ってきて欲しくて。

メリノ
おまえが追い出したようなもんなのに。

カラム
引き金引いたカラムなら、何とか出来るかもしれないって思
つて。

カラム
メリノー！

メリノ
な、なに、カラム。

カラム
おまえは本つつつ当に勝手だな。

メリノ
えええ？

カラム
勝手に追い出しといて、今度は必要になったから戻ってこい
つて。それで帰ってきてても全然姿現さないし、その間に、ど
れだけややこしくなったか分かってんの。

メリノ
それは、カラム帰ってくるの遅いんだもん。ぼくもうあんま
り動けなくて。

カラム
リリには質問攻めに合うし、シレンには目の敵にされるし、
家はなくなってるし、あーもう、踏んだり蹴ったりだよ。

メリノ
けど、カラムは6年前のあのまま里にいること出来た？ 親
友の心を抜き取ったのが自分だつて気づいたまんま、里にい
ること出来た？

カラム
メリノ。わたし、あの糸をロウウの中に返す。

メリノ
無理だよ。一度紡いだものは、元に戻すことはできない。

カラム
でも、このまま何もしないなんて出来ないよ。

と、そこへシレン、トット、ロウ、リリ、イロハがやってくる。

シレン
うわ、なんだここ。ぶわつ、蜘蛛の巣。ぺっぺっ！
早く出てよシレン。

イロハ

リリ

カラム

リリ

トット

イロハ

ロウ

メリノ

トット

リリ

イロハ

カラム

シレン

リリ押さないで。ああん。

気持ち悪い、もー早く。

みんな？

カラム！ 探したんだよ。

ここ、カラムの部屋？ なんでこんなところに。

あれ、さっきの猫どこいった？

メリノ。

なんで入ってきてるの。

え、なに今の。

まさか、メリノ？

あいつ喋った。

おまえら、なんで。
カラム。

シレン、手袋をカラムに向かって差し出す。

悪かった。

え……。

それ。

おれ、どうしても、カラムみたいになりたかったんだ。誰よ
りも紡ぐのが上手くて、情熱があつて、認められてるカラム
を見てると、悔しくて、憎らしくて、仕方なかった。（手袋
を見て）これがあるからって、どうにかなるなんて少しも思
つてなかつたけど。逆に思い知らされた。お前はやつぱりす
ごい。

ごい。

……へへ、照れるね。

なんだそれ。お前、早く受けとれよ。

カラム

すごいのはシレンだ。

シレン

え。

カラム

シレンと違って、わたしはやりたい事しかしてないから。そのせいでとんだ失敗しちゃうこともある。シレンは、自分のやった事をちゃんと認めて、その上で、里を守ろうとしてる。シレンのがずつと大人だよ。かつこいいって思うよ。うん、惚れるね。

え、あ、な、なんだよ、それ。

シレン

(慌てて) そうだよ、シレンがすごいのは、他の誰でもない、

あたしが一番知ってるんだから。かつこいいって思うよ。うん、惚れるね。

シレン

あ……ああ。ありがとう。

トット

……！

周りが、ミシミシ、音を立てる。

シレン

なんだ今の。

カラム

ここも危ないんだ。

シレン

危ないって。

カラム

きつともう少して糸になって消えちゃう。ロウ。

ロウ

え、なに。

カラム

ごめん。ちゃんと返すから。

ロウ

カラム？

カラム

わたしがちゃんと返すから。

ロウ

返すってなに？

メリノ

意気込むのはいいけど、いくらカラムでも、もう元には戻せないよ。だから、これ以上変わるくらいだったら、いつその

こと。

と、そこへ入ってくるのは。ミュー。

カラムーっ！

ミュー、外で待つてろつて言ったのに。

ごめん、でもおれ。

何しに来たのミュー。

おれは、来たかっただけ！

……。

カラムのそばに来たかっただけ！ ついでに、(メリノに)

お前が勝手なこととして、生きてるやつらの邪魔しないように

見張りに来ただけ！

なんだそれ。別にぼくは。

生きてるやつらはみんな変わつてくの。人も、言葉も、世界

も変わつてくの。おれらお婆けみたいなやつが、そこに口出

ししちゃダメなんだ。

でも。

メリノ。いや、メリノの中にいる、何か。お前は後悔してた

のかも知らないけど。わたしはお前じゃないし、自分のやつ

たことを、後悔するだけで終わらすのは嫌だ。だからわたし

は。

どうするの。

糸を、ほどく！

間。

シレン

ロウ

カラム

え？

カラム、どういうこと？

だから、紡ぎ屋は撚りをかけて、糸を紡ぐことしかできない。でも撚りをかける向きを変えることは、きつと出来るんじゃないかなって思うの。だからわたし、撚りがほどけていくように、向きを変えて紡ぐ。そうすれば、里の糸も、紡ぎ直すことできるかもしれない。

うまくいかないよ。そんなこと。

そんなの。

やってみないと分かんないだろ！

……やってみないと分かんないでしょ。腕に撚りをかければ、出来るかもしれないじゃない。

周りが、ミシミシ、音を立てる。ほどけていく。

ミュー

トット

メリノ

カラム

メリノ

カラム

メリノ

カラム

カラム。

崩れてるよ、あそこ。

分かったよ。カラムがそうしたいなら、ぼくは見てる。最初から見てたんだもん。最後まで見届ける。

うん、見てて。

けど、ロウの糸はきつとダメだ。撚りをほどくだけでは、ロウの糸は元に戻せないよ。

けど、戻るまで、ほどくしかない。

無駄だよそんなこと。それならいっそ。

少しほどいてダメなら、もつとほどいて、それでもダメなら、もつともつとほどいて、腕に、体に、全身に、全てに撚りをかけて、ロウの糸にかかっている撚りを全部わたしの中にも

メリノ

カラム

メリノ

カラム

らつちやうくらい、わたしの全てに撚りをかけて、もしかしたら、そこまでしたら、糸を綿にまで戻せるかもしれない、そのくらい、撚りをかけて、ロウの糸を心に戻す。

無駄だよそんなこと。カラムだつて分かつてるんでしょ。

無駄つて分かつても、それでも、やるの。やらなくちゃいけないの。

どうして、カラム。

じゃ、いつくよーーーー！

カラム。全てをほどいていく。

仲間たちも力を貸す。

それを見つめるメリノ。

エピソード

ロウ。ひとりで糸車を回している。

糸車には、あの紅い手袋がひっかけられている。

そこへ出て来る、リリ。

何か弾こうか。

リリ、来たんだ。

仕事中なんでしょ。

ううん、今日はお休み。

でも、それ。……あ。そつか。売り物じゃない分か。

ねえ、ずいぶん長くなつたと思わない？

どこまで長く紡ぐ気？

ぼくの手が止まるまで、かな。

何か弾く？

大丈夫、一人で紡ぎたいから。

……そう。

シレンのここに行つて来なよ。向こうは朝から晩まで紡いでるつていうよ。

えー。あそこうるさいんだもん。わたしが弾いてても誰も聞いてないよ。

じゃ、楽器変えてみたらどうか。トランペットとか、そしてみんなの手が早くなつていいかも。

奏で屋も進化の時期ってこと？

ぼくは、リリのピアノ好きだけど。

リリ

ロウ

ありがと。仕方ないから、たまにはイロハのところ冷やかにいつてくるか。じゃ、また来るねロウ。うん、また。

リリ、去る。

ロウ、一通の手紙を取り出す。

お元氣ですか。ぼくは、相変わらずです。カラムがほどいた糸を紡いで、みんなで里を元の姿に戻してから、もう何日たつたのかな。シレンが砦でやっていたことは、少しづつ、他の紡ぎ屋にも出来るようになってきました。必要な分だけ紡ぐこと、人からは絶対に紡がないこと。シレンが口を酸っぱくして言い続けています。イロハは砦でバイトしながら、染め屋を続けています。ランプは、トットと一緒に忙しくなつた砦を手伝っています。うちが静かになつて暮らしやすくなつたけど、実はちよつとだけ寂しいかな。作家も相変わらずうんうん唸りながら、里の毎日を綴っています。リリは、砦に行つたり、他の紡ぎ屋のここへ出入りするようになったり、ちよつと行動派になりました。メリノは、気が付いたらいなくなつてた。どこいつちやつたんだろうなあ。ぼくはというと、相変わらず糸を紡いでいます。昔ながらの方法で、ゆつくり、糸車を回しながら。そうそう、カラムが旅立つてから、ずーつと紡ぎ続けている糸があります。カラムの事を考えながら紡いでたら、なんか、長くなつちやつて、こうなつたら、どこまで長く紡げるか挑戦だ、とか思つたら、床一面真っ白になるくらい紡いじゃつて、それでもまだ、紡いでいます。良かったら、見に来てください。旅の途中でも構いません。

ぼくはどうせきつと、ずっとここにます。いつでも帰ってきて下さい。毎日、届かない手紙が増えていきます。けど、手紙なんか届かなくなつて、きみには届いてる、と思います。いつでも帰つてきて下さい。今もどこかを旅するカラムへ。きみの……。

ロウ、次の言葉を、継ぐのをためらうが。

ロウ

……親友の、ロウより。

ロウが紡ぐ、白い一本の糸。

カラムがそれを、遠くから見つめている。

傍らには、ミューがいる。

カラム、ミュー、いなくなる。

ロウはいつまでも、糸を紡いでいる。

終幕。

〈上演記録〉

羊とドラコ Stage-01

「紡ぎ屋カラムと紅い糸」

脚本・演出 竜崎だいち

●出演

紡ぎ屋カラム … 丹下真寿美

紡ぎ屋ロウ … 松村里美

発明家シレン … 竹村晋太郎 (志劇屋)

編み屋トット … 真壁愛

奏で屋リリ … 西村朋恵 (こまち日和)

彩色屋イロハ … 土井隆 (劇団そとばこまち)

紡ぎ屋見習いランプ … 川端優紀

作家 … 浅田武雄 (OZLE@大阪)

銀行員 … 一瀬尚代 (baghdad cafe)

壁のシミの猫ミュー … 西分綾香 (志劇屋)

メリノ … 竜崎だいち

師匠 … ※日替わりゲスト

石原正一 (石原正一ショー)

一明一人

螻蛄襲 (PM/飛ぶ教室)

遠坂百合子 (リリーエアライン)

河上由佳 (満月動物園)

宮川サキ (sunday)

※俳優のクレジットは上演時に準じています。

●スタッフ

舞台監督/今井康平 (CO)

照明/海老澤美幸

音響/児島塁 (Quantum Leap*)

舞台美術/高島奈々 (七色夢想)

衣装/植田昇明 (kasane)

宣伝美術/北村美沙子 (Drive)

制作/浦田瑞希 (観劇三昧)

ケータリング/白野景子

映像撮影/武信貴行 (観劇三昧/SP 水曜劇場)

舞台写真/堀川高志 (kutowans studio)

●開催日

二〇一六年三月二〇日(木) ~ 十三日(日) 6ステージ

●会場

芸術創造館 (大阪)

大阪府大阪市旭区中宮二丁目二一ノ二四

こちらの作品の著作権は放棄しておりません。

上演等のご希望や、各種お問合せは、左記メールに御連絡下さい。

羊とドラコ 竜崎だいち

ryuzakidaichi@gmail.com